

へびの魔法
改訂版
(後編)

とくなのぞみ

この本は縦書きでレイアウトされています。

ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあることをご了承ください。
本電子書籍は購入者の閲覧目的のためだけにファイルの閲覧が承諾されています。
目的を超えた転載、配信、送信などの行為は著作権法上、禁じられています。

『後編』のはじめに

本作『へびの魔法 改訂版（後編）』は、二〇一一年十一月に株式会社文芸社から刊行した『へびの魔法』に加筆・修正し、「前編」「後編」の二部構成にしたものです。

『へびの魔法』という昔話は、アフリカ、ザンジバル地方に伝わる民話です。娘が「腕を切断される」というショッキングな冒頭ですが、白状してしまえば、このモチーフの「意味」はいまだに解明できていません。

むしろ、このモチーフのもたらす強い印象が、筆者の精神に、さまざまな連想をもたらした、というのが、本作『へびの魔法』の醍醐味だったとも言えます。

同様の「強い印象」が通底しているのかもしれませんが、『改訂版（後編）』では、ゴヤの名画『我が子を喰らうサトウルヌス』についても考察してみました。「親」が「子」を喰らうというのは、どう考えても「主客転倒」です。通常は「子が親のすねをかじる」のであって、その逆ではありません。いろいろ思うことがあり、この名画についても考察してみようと思いい立ちました。

旧作品の保存箇所としては、「第5章 へびの魔法」に加え、「第6章 人間モーセと一神教」があります。「第6章」の一番の読みどころは、『ミケランジェロのモーセ』という、フロイトの

論文の解説です。やはり筆者は「美術が好き」なようです。

本書は、そんなに堅苦しい作品ではありません。学術的にうんぬん、ではなく、筆者の「ひとつの自由連想」であり、「ひとつの解釈」を提示しただけのものです。この「とくなのぞみ・ワールド」の刺激を受け、読者の中のどなたかが、また別の「自由連想」を展開されるのであれば、それもまた楽しいことだと考えております。

それでは、楽しいファンタジーの始まりです。

二〇一四年十月

とくなのぞみ

目次

『後編』のはじめに

第5章 ヘビの魔法

「あらずじ・その1」腕の切断

「あらずじ・その2」木の上の娘

「あらずじ・その3」ヘビの魔法

「まとめ・その1」 絵画化

「まとめ・その2」 変わりダネの援助者

第6章 人間モーセと一神教

(1) モーセはエジプト人だった

(2) ファラオとはだれか

(3) メデイアンの祭司イェトロの娘婿

(4) なぜ神の名は「ヤーヴェ」なのか

(5) 「メデイアン」の謎解き

(6) ヘルメスの杖

(7) 十戒

(8) モーセの死

(9) イクナートンの謎

(10) 告白

第7章 我が子を喰らうサトウルヌス

A. 我が子を喰らうサトウルヌス

B. カルロス四世とその家族

C. スペイン現代史へのつながり

D. 地上の三位一体

E. 出版界のサトウルヌス

F. 参考までに

(a) 考察・その一／「B社商法」の利点

- (b) 考察・その二／「B社商法」の罪・その(1)
 - (c) 加筆・その①／仮定的計算(二〇一四年十一月)
 - (d) 加筆・その②／神隠し(二〇一五年一月)
 - (e) 考察・その三／アウフヘーベン
 - (f) 補遺／「B社商法」の罪・その(2)
 - (g) 加筆・その③／悪魔の証明・否定的解釈(二〇一五年二月)
- G. STAP細胞事件・番外編
- H. ポリユペモス
- I. アルプスの少女ハイジ・裏話
- おわりに — 私と本 —

もうひとつのおわりに — 虎穴こけつに入らずんば、虎兇こじを得ず —

個人的なおわりに — 「B社商法」について、徹底的に考えてみた —

(a) 「実売数」と「廃棄数」。「ひらめき」は突然に。

- (b) 「情報の独占」か「企業秘密」か。「常識的な判断」が必要だ。
- (c) 「誠実な共同出版」を構想する。私は経営コンサルタントではないけれど。
- (d) 結局は「断念」。でも「問題提起」はできました。

第5章 ヘビの魔法

『ヘビの魔法』は、アフリカ中部、東海岸のザンジバル地方に伝わる民話です（参考文献『子どもに聞かせる 世界の民話』矢崎源九郎編）。このあたりには、アフリカの文化とアラビアの文化が融合した「スワヒリ」という文化が存在します。

興味深いことに、この『ヘビの魔法』は、グリム童話『手なし娘』（KHM31）ととてもよく似た話なのです。

「あらすじ・その1」 腕の切断

昔、あるところに兄と妹がいた。妹は働き者だったが、兄は怠け者だった。

妹は裏庭でかぼちやを育て、それを売って暮らしていた。

ある日、兄が鎌を持ってやって来て、かぼちや畑へ行き、かぼちやをめちゃめちゃにした。妹はあわてて止めに入った。「兄さん、お願い。これがなかったら、私はあしたから暮していけません